

令和 6 年度 大淀川・小丸川学識者懇談会 議事概要

日時：令和 6 年 6 月 12 日(水) 14:00～16:00

場所：宮崎河川国道事務所 別館 3 階会議室

開催形式：対面(WEB併用)

I. 議事次第

1. 開会
2. 挨拶
3. 委員紹介
4. 懇談会の目的と規約
5. 委員長選出
6. 議事
 - 1)大淀川水系河川整備計画点検について
河川整備の進捗・実施状況
 - 2)小丸川水系河川整備計画点検について
河川整備の進捗・実施状況
 - 3)岩瀬ダム再生事業 事業再評価
継続(前回評価から3年)
7. その他
8. 閉会

II. 主な意見等

【※青字は、事務局からの回答等】

大淀川水系河川整備計画点検について(資料 2)

委員

大岩田の遊水地について、これからどういう整備が行われるのか教えて頂きたい。

事務局

大淀川の河川水位上昇に伴い、一時的に洪水を貯留するため、大淀川の河川堤防や遊水地周りの周囲堤、流入部(越流堤)等の整備を進めていく予定である。

委員

完成予定はいつ頃の予定か。

事務局

現在、用地買収中であり、その進捗次第となるが、買収が終了してから 10 年程度で完了させたいとは考えている。

委員

河川整備の進捗状況を示した平面図があるが、整備の優先順位の決め方を教えて頂きたい。また、宮崎市街部の河道掘削においては、今後どの程度、残っているのか。

事務局

河川整備は下流からの実施が原則となっているため、宮崎市街部から優先して実施していくことを基本考えている。下流に負荷を与えない上流部の大岩田遊水地は同時に進めている。金田地区については、R4 出水で内水被害が大きかったため、優先的に着手した。

また、宮崎市街部の掘削に関しては、実施している鶴島地区、跡江地区以外に、3k0 付近の掘削があるが、岩河床(宮崎層群)であるため、掘り方の検討をしている。

委員

流域治水は最近のキーワードになっているものの、大淀川の流量を増やす方向の治水対策についての使用は適切ではないと思う。自治体側の浸水対策は非常に重要なことであるが、流域治水の範疇にこれを含めてしまうのはどうなのか。

流域治水はあくまで、上流側で貯めて下流への流出量を減らし、下流域を含む流域全体で浸水被害を軽減させることが基本的な考えである。流域治水プロジェクト自体を主導されている国交省の方から、コンセプトの共有等、指導の方も進めて頂きたい。

事務局

流域治水の概念は、重々承知しているが、一方で、R4 浸水の解消に向けては自治体とも連携して取り組んでいる。作業部会の中でも、内水被害の解消に向け、流出抑制対策のハード対策等も併せて、実施していくよう協議しており、今後も継続する。

委員

床下浸水許容が生じる地域住民への理解が得られるよう、内水対策のアピールも大

事と思う。釈迦に説法ではあるが、その辺も区分しながら資料を整理された方が良いかと思う。

委員

大淀川の河川敷や堤防上においては、散歩や日頃の生活での利活用が、九州の直轄河川の中でも非常に多い河川と以前に聞いたことがあるが、最近の統計的な数字はあるのか。

現在の河川の利活用状況を知る上でも大切な情報だと思うので、資料にも整理し水辺の賑わいづくり等、新しい取り組みと併せて積極的に PR したら良いと思う。

事務局

国交省で 5 年に 1 度、空間利用実態調査を実施しており、ゴールデンウィークや平日等における利用人数を調査している。なお、手元に資料がないが、急激な増減はなかったと記憶している。

今回は毎年実施する整備計画点検のため、事業の進捗状況の部分に絞った説明とさせて頂いたが、再評価の際は、しっかり資料を整理して、説明する。

委員

岩瀬川流域での流域治水も、小林市と連携して進めることで、大淀川全体の流域治水に対しても貢献し、有益に働くのではと思う。今回、紹介された都城市のような取組予定の有無等、お聞きたい。

事務局

流域治水協議会では、流域全体の市町村が入って議論しており、小林市の取組は、護岸整備や雨水函渠整備、水田の貯留機能の向上等になっている。

小丸川水系河川整備計画点検について(資料 3)

委員

樋門・樋管については、高齢化等による操作人の確保が厳しいと思われ、今後の人員不足の進行が危惧される。対策として自動化の話が大淀川ではあったが、今後、特に小丸川について対策の予定があればお聞かせ願いたい。

事務局

小丸川の無動力計画は、全体で7箇所あり、その内2箇所が完了しており、残りについても、実施に向けて進めている。

委員

無動力化がある程度進んできているような感じはする。なお、高齢化に伴い操作人の数が減少し、掛け持ちでの操作等も求められる中で、これまでも操作の不具合等による責任問題が生じる等、一番、難しいところだと思う。

委員

流域治水プロジェクトの河口付近において、海岸保全施設の整備（掘削土砂の活用）という記載があるが、これは小丸川下流部にて記載のある河道掘削による土砂を持つていくという理解で良いか。

また、長期的な対策として、河川からの土砂供給量の増大が挙げられると思うが、土砂管理に関わる現況の取組状況について聞かせて欲しい。

事務局

質問の通り、河川と海岸で連携しながら実施していく旨を記載している。

また、長期的な対策に関しては、中部流砂系総合土砂管理に取り組んでおり、耳川・小丸川では計画を策定済みで、一ツ瀬川と大淀川でも今後策定予定である。なお、具体的な実施状況としては、河川の土砂を海岸に運搬している状況である。

委員

以前、置き砂による実験的な取り組みをされていたが、今のところ、もう継続はされていないということで宜しいか。難しい大変な話だと思うが。

事務局

置き砂に関しては、周辺の自治体・県も含め色々と調整しているが、了承頂けていない。

委員

小丸川流域は、かなり細かい流砂が多いことが中部流砂系の委員会でも共有されているが、やはり置き砂等の実施の際には、粒径にしっかり着目しておかないと濁りのもと

になり、水産業等に大きなダメージを与えることもあるので、その点、きちんと評価した上で検討して頂きたい。

また、小丸川は河口域で岩ガキの漁獲が有名であるが、(従事者数に左右されるところもあると思うが、)経年的な増減等の情報も、調べておいた方が良いかと思う。

事務局

粒径の件は、総合土砂管理計画で流すべき粒径を決めている。地元も濁水問題を懸念しており、ご指摘の通り、しっかり粒径を見ながらやっていきたい。

また、河口域の岩ガキについては、現状を把握していないので、情報収集に努めたい。

委員

今、掘削土のうち、礫はどうされているか。

小丸川の河口付近は、結構礫が多く分布していると思うが、海岸の方で養浜をする際、砂に代わって、粒径の大きい礫を積極的に入れていくことで歩留まりを上げていくことを考えており、一つの供給源になり得ると思われる。

事務局

礫の使用判断をしている同事務所内の海岸管理担当とも、話し合いながら進めたい。

事務局

現在、当然河道掘削をする際には礫分も含めて掘削すべき箇所を掘削しているが、養浜材としては、養浜用に限られた粒径を基本に使っている。

少し大きい粒径については、実験的に、人工構造物で挟まれた区間に一部入れたところはありますが、未だそこまで礫分を主体として入れているような状況にはない。

委員

ウミガメの産卵とも絡むので、慎重に。まずは試験的にやるとしても、順応的に実施した方が良いと思う。

委員

資料にある「小丸川水系流域治水プロジェクト」は、現時点で既に完成しているのか。それとも今後の事情によって、具体的な取り組みが変化していくのか。

事務局

このプロジェクト自体は、令和6年3月時点でとりまとめて、一旦は完成している。但し、各自治体の実施状況等によって、新たな取り組みが出てきたら、取り込んでいく。

委員

防災・減災対策における「高齢者等避難の実効性の確保」のところで、避難確保計画の策定済み施設数が記載されているが、流域全体で見た時に、どの程度カバーしているのか。もしご存知であれば、教えて頂きたい。

事務局

把握していないため確認する。

岩瀬ダム再生事業 事業再評価(資料4)

委員

堤体左右岸の地質図を見て興味を持ったが、地質的に互層が斜めになっているのが特徴。トンネルは、右岸ルート of 基盤岩の部分に開けるのが上側の滑りも抑えられると考える。地質は専門ではないが、そのような解釈で良いか。

事務局

右岸トンネルルート案は基盤岩ではあるが、トンネル呑口部となる基盤岩表層が地すべり面や岩盤ゆるみの懸念があり、一方で、左岸トンネルルート案は第四紀層の浸透性の問題やトンネル延長が相当長くなることや発電施設の鉄塔等にも影響する懸念が想定されている。

専門家と協議を進めているが、未だ判断できずにいるところ。判断するためには、少し調査が必要とのことで、引き続き、調査精度を上げてルートを決定していきたい。

委員

今回の計画に対し異論はなく、賛成である。

別の視点として、上流に位置する浜ノ瀬ダム(農業用水)の完成後から、岩瀬川において、かなりの濁りが確認される。岩瀬ダム再生事業の実施後も慢性的に続いていると再生事業との関連を問われる懸念もあると思われるが、今後の対応予定等があるか。

事務局

濁りの発生状況は認識しており、再生事業実施前の今現在より、濁度の計測によりモニタリングしながら、現状のデータ取得を進めているところである。

なお、岩瀬ダムも堆砂が進行しており、掘削が必要となっていくが、その際の対策も水質シミュレーション等、上流からの供給も踏まえて、検討していきたいと考えている。

委員

当時、検討した代替案とは、どのような案か。

また、トンネル設置箇所について検討中とのことだが、工期は十分間に合うのか。

事務局

整備計画策定時において、河道掘削案、河道掘削＋放水路案、遊水地案等による比較検討を実施しており、社会的条件やコスト面を含め、最も有力な案として、岩瀬ダム再生案が採用されており、現状も変化はない。

工期としては、トンネル施工に5～6年が工事期間というイメージであり、地質的な問題に対して結論及び再生工法決定は、令和9年度頃が判断のタイミングになってくると考えている。なるべく早く結論を出して、建設に移行すると共に、もし事業的・コスト的に厳しく変更が必要になった時には、直ぐに改めて再評価にかけさせて頂きたいと考えている。

委員

岩瀬ダムの近傍においては、平成の初め頃、地質上、難しいと判断された幻の治水ダムがある等、地質状況は厳しい面がある。逆に言うと、現在の岩瀬ダムは（当時、企業局にいた地質の専門家のもと）、隙間の隙間で、本当に上手く出来ており、非常に苦労して造ったとも聞いている（その専門家は、定年退職後亡くなれており、詳しい話は聞けない）。

気候変動を踏まえて増大する基本高水に対し、ダム以外の代替案としては、放水路や遊水地も考えられるが、候補地としての制約等もあり、なかなか難しい面もある。そのような中、一方策として、岩瀬ダムにも、出来るだけ貢献して欲しいものの、あまり無理して造っても、治水安全度が本当に確保できるか等、懸念も残る。そう考えていくと、大淀川の治水は、非常に難しいと感じるが、いかがな見解か？

事務局

気候変動を踏まえた外力 1.2 倍の議論に入っていくが、その中で岩瀬ダム再生として、

今の計画以上に対応できるのか等も踏まえて検討しつつ、あとは他の追加ダムの可能性等も含め、これから議論していく予定。いずれにしても、今時点のダム事業においては、岩瀬ダムで出来る最大限の可能性の検討をしっかりと進めていきたいと考えている。

委員

地質調査と健全化の調査は、気候変動に伴い外力が 1.2 倍となる状況下で、岩瀬ダム再開発がどれだけ頑張れるかの見極めにおいても非常に重要と思う。
令和9年がリミットだと、あと2～3年しかないが、頑張ってもらくということで宜しいか。

各委員

賛成

委員

では、対応方針(原案)のとおり、「事業を継続する」ということで、学識者懇談会として了承する。

閉会

事務局

本日の資料及び議事要旨については、事前に委員確認の上、事務局 HP での公表を予定している。また岩瀬ダム再生事業(事業再評価)においては、後日、九地整の事業評価監視委員会で対応方針(原案)を報告予定である。

以上